

静かな潮の流れ 穏やかな時の流れ



まちあるきの考古学

風待ち 潮待ち の港町 御手洗

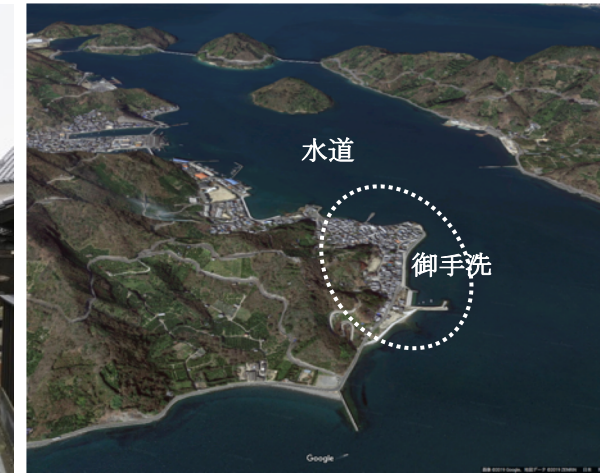
瀬戸内にある江戸時代の中継貿易港には、人が集い、物が集まり、文化が育ちました。いま、穏やかな時の流れが、その栄華の残像を伝えてくれます。

瀬戸内斎灘にある大崎下島の御手洗は、沖乗り航路の寄港地として、江戸時代に新たに開かれた港町です。瀬戸内海の航路は、中世までは、ほとんどが陸地に沿って航行する「地乗り」でしたが、近世に入ると航海技術が進み、瀬戸内海の中央部の最短距離を行く「沖乗り」航路が利用され始め、新たな航路上にある潮待ち風待ちの港が必要となりました。

その港は、風当たりが少なく、潮の流れが緩やか場所に求められました。

御手洗の港は、対岸の島との間の水道に位置しています。鞆浦や室津のように入り江ではありません。

その水道には小島が点在するため潮の流れが穏やかで、良港の条件に当てはまっていたのです。



御手洗のまちあるきでは、江戸期に繁栄した港町の名残りが沢山見られます。

波止(防波堤)、灯籠(灯台)、雁木(船着場)などの港機能だけでなく、航海の神様を祀る住吉神社や潮待人のための船宿までが残っています。

古い街並みに紛れて、いくつかの洋館があります。

ペンキ塗りの下目板張り外壁に縦長の上げ下げ窓は、港町によく映えます。

時計店の瀟洒なガラス窓越しに見えた、時計の補修に精を出すおじいさんの姿が印象的でした。

きれいに補修された看板建築も残っていて、この街が昭和初期まで栄えていたことを今に伝えてくれます。

通りの先には海と青空、対岸の島影まで見通すことができます。

ここは港町なのだ、と感じられる風景です。



御手洗の町並み保存は、緒に就いたばかりのようです。

古い建物には昭和の時代に付けられたアルミサッシが見え、電線が空を覆い、通り沿いにはプレハブ住宅やタン葺きの工場が目立ちます。

街の歴史や建物に関する説明看板などは見当たらず、町ぐるみの保存や町おこしの動きにはまだ力強さが感じられません。

瀬戸内沿岸は、鞆浦、竹原、尾道などに代表される町並み保存の先進地域です。

その中であって、存在感を出して人を惹きつけるには、何かが足りないようです。



御手洗は、「とびしま海道」を半時間ほど走った終点、大崎下島の東端にあります。

広島県呉市から斎灘諸島の島々を結ぶルートは「とびしま街道」と称され、斜張橋、吊橋、トラス橋など様々な8つの橋梁が島々を繋いでいます。

とびしま海道沿いには、御手洗の他にも、歴史的資産がいくつかあります。そして、自然景観や沿岸の風光明媚な景観、海や山の幸もふんだんにありそうです。

それらをネットワークする仕組みが欲しい気がします。



まちあるきの考古学